野木小学校同窓会報
第18号
平成18年12月
野木小学校同窓会編集部

ご挨拶

第42回卒（昭和26年）
同窓会長（兼田）　福井康二

同窓会員皆様におかれましては、ますますご健勝にてご精励のことと存じ、衷心よりお慶び申し上げます。

常々、本会の諸事業活動にまた、運営の各面に亘り特段のお力添えと深いお心を頂戴いたしまして誠に有難く、厚くお礼を申し上げます。

ご周知の如く昨年の三月三十一日合併により若狭町になって以来、早一年半ばを迎えましたが、行政こそ変化が見えますが、ここ「野木の里」は、少しも変わりなく楽しく住みやすく親しみの濃い里そのものです。

そんな中で、母校も先生方の良きご指導のもとに、児童もつつがなく生き生きと成長し、次代を担う姿が日々育まれていくのを目のあたりにすることは嬉しい限りであり、同時に本会の事業も極めて順調に進展していると実感いたしている所であります。

さて、最近どの新聞を見ても、社会面では相変わらず外国における民族差と、宗教による戦闘やテロ事件が毎日紙面のどこかを埋めていますし、一方国内では親子の問題や尊属の事犯、更には外国人による凶暴な子どもたちを巻き込む無差別な事犯や自殺が後を絶ちません。

そんな中で、昨年より取り組まれている「地域・学校協議会」活動は、母校にとって誠に有難い事業であります。

今どの家庭でも、毎日児童の安全安心の問題を抱えておられると思いますが、学校と地域が一体となる事業として、諸課題の解決策の一つとして発足したものであり、児童の安全確保を野木地区全体で取り組む活動をいたしております。

地区では、「叱ろう、守ろう、育てよう」をスローガンに、地域が一体となって学校と連携し、地域社会全体の力で教育力を高め、子どもたちを育てることに取り組んでおり、地域見守り隊や各種団体等、人と人の交流を通じ、直接子どもたちとふれあうことで、その温もりを感じあえる事業として、大きな期待を寄せているところです。そしてこのような活動を通して、願わくば、野木の将来を担ってくれる児童がきっと根付いてくれるものと確信している一人です。

末文にあたり、本号を数える本誌に多くの方々の寄稿を賜り、より豊かな紙面として発刊できましたことに深甚のお礼を申し上げ、同時に、会員各位のご発展とご健勝、ご多幸と更に諸縁吉祥を念じ以て、ご挨拶といたします。

合掌

地域を誇り、地域を愛する子どもたち

学校長（堤）　内藤譲治

寒さが肌をさす時季ですが同窓会員の皆さまにおかれましては、町内はもとより全国各地でますますご健勝にてご活躍のこととお慶び申しあげます。また、日ごろの温かいご理解と多大なるご支援に衷心より感謝申し上げます。

さて、安倍内閣が「すべての子供に高い学力と規範意識を身につける機会を保障すること」をめざして設置した「教育再生会議」の発足とほぼ同時期から、皮肉なことに北海道や福岡で、いじめを苦にした小中学生の自殺がクローズアップされ始めました。さらに高校必修科目の履修不足問題が表面化し、国会で審議されるほどの問題となりました。安倍総理は「教育再生」を最重点項目にすえており、そのために公教育の再生や、家庭・地域の教育力の再生が重要であるとの考えを示しました。

本校は昨年度より、「福井型コミュニティ・スクール」として地域ぐるみで「輝く野木の子の育成」を推進しています。公教育再生のための検討事項の一つである「家庭や地域の教育力を高め、誰もが『家庭、ふるさと、このすばらしきもの』と思えるよう、地域ぐるみの教育を再生するための方策」にいち早く取り組んでいるともいえます。

今年度も昨年以上にさまざまな支援や協力をいただいて参りました。例えばホリデースクールでは、琴や和太鼓の演奏を指導していただき「縄文まつりのオープニング」や「敬老会」「のぎハート・イ

ン・コンサート」で発表することができました。また、パレア若狭での「町内音楽会」では、小笠原小学校との交流や自然との共生をテーマにしたオリジナル曲の合唱を堂々と発表できました。また、食育の重要性が叫ばれる中、野木地区で生産された野菜を給食に提供していただいています。ほんの少量の野菜でも学校まで届けていただける有難さを心から感謝しています。

また、犯罪や事故から子どもたちを守るために「野木っ子見守り隊」として地域の皆さんが、下校時に子どもたちと一緒に歩いてくださっています。不審者だけでなく冬眠前の熊や猿などの被害もマスコミで多く報道されましたが、下校時の安全が保障されていることをありがたく思っています。

学校教育に対して、英語活動（教育）・認知症の理解指導・環境教育など社会情勢の変化にともなう指導が次々と求められています。このような時こそ「質の高い教育を提供し、学力の向上を図る」ために、計画の重視から評価を重視した学校経営へシフトすることが必要になります。「地域・学校協議会」を充実させより開かれたコミュニティ・スクールとして教育活動を向上させていきたいと考えています。

同窓会員の皆さま、機会があれば是非母校を訪れ後輩を励まして頂きますとともに、地域から信頼される学校としてはどうあるべきかといった野木小学校の将来像について、ご提言を賜りますようお願い申し上げます。なお、野木小学校のホームページをリニューアルし、ブログを取り入れました。ぜひ一度アクセスしていただき、コメントや電子メール等で近況やご意見をいただければ幸いです。

最後になりましたが、皆様のご活躍とご多幸を祈念申し上げまして、ご挨拶といたします。

野木

町議会議員（兼田）　藤田美穂

「故郷」それはいつの間にか自分の体に沁みていて、空気のように、あるときにはありがたさを感じないけれど、なくなったとき初めて苦しいと思うもの。そんな風に思っています。

上中音頭の「うちへ来てみな聞こえはせぬか、海はのうても波の音。稲穂に黄金の波が打つ。」という歌い出し。野木のことを歌っているとすぐに思い当たりました。以前、東京から来た友人が店の二階に泊まり、窓から西側の田んぼを見て「稲穂の波の中に浮いている」と表現したことがありました。二人、大きな海原に浮かんだ船の上で、稲穂の波をボーッと眺め続けました。この幸せ。

この世に「生」を受けて、幸か不幸かなんて年中考えているわけではないけれど、私の今までの「生」の中で、この野木に嫁いでからの「生」は、それ以前に比べてとてもゆったりと、いや結構忙しいんですが(笑)、その中に心穏やかな時間が必ず持てる。ふと幸せを感じるのです。これって何だろうと思うのです。ここに住む人の成せる業か、ここが抱くこの自然か。

多くの人に迷惑をかけていながら、一人幸せなんて言葉に出来ないのですが、ちょっと成長したのか「ありがたいなあ」と思うことが増えました。人のお世話になってありがたいも何も、幸せも何も、迷惑かけずに人間一人で生きろよ！という「生」を信じていた私ですので、こんなに人に関わってもらえる、放って置いてよと言えない暖かな雰囲気は、「家に嫁いだ」という責任を感じて初めてするすると溶けたのかもしれません。

全く知らない遠くの町の絶景を目にしても、綺麗だとは思うけれど、幸せは感じない。誰かと関わってふと見上げた星空は、なんて綺麗なんだろう、なんて幸せなんだろうと思ったりします。この美しい風景と、人との関わりが、「故郷」と呼べる源であるのかも知れないと思っています。

この「故郷」がいつまでも「故郷」でありつづけますように。私達の子供達がこの「故郷」を愛し、育まれ、その学び舎である野木小学校がいつまでも「故郷」でありつづけますように。

最後になりましたが、同窓会のますますの発展と会員の皆様のご健康をお祈り申し上げます。

旧職員からの便り

追憶

若狭町無悪（昭和63年度の教頭）　高橋利男

私が野木小へ赴任しました昭和六十三年は、若狭中核工業団地の事業着手、恵懐公園の完成、向山古墳発掘で金の耳飾り等出土と野木地区にとって大きな話題が続きました。

そして、翌年一月七日には昭和天皇が崩御されました。

職員玄関に弔旗を掲げながら激動の昭和時代の終えんを感慨深く思ったことなどの想い出が昨日のようによみがえって参ります。

教頭として三年間お世話になりましたが、その間、地区の方々の学校に対する理解と献身的な協力に何度頭の下がる思いをしたかわかりません。

今、教育界では地域に開かれた学校づくりを目指していろんな取組が見られますが、野木小には創立当初より地区との連携を大事にするよき伝統があったようです。

学校と育友会、同窓会等とは和気あいあい、集まると「野木小の為に」を合い言葉に協調し合いました。育友会報を地区全戸に配布したり、同窓会報を全会員に送付したりすることは、当時他校にはあまり例がなかったようでした。

宛名書きに汗したことが懐かしく思い出されます。こうした伝統が今も続けられているようで、地区の方々の愛校心育成に大きく寄与していることを痛感したものです。

短期間でしたが、野木小は印象深く想い出の多い学校です。その一部を紹介します。

（一）初年度の運動会は、にわか雨のため急きょ体育館で実施するはめとなりました。しかし、雨が止んで三十分もすると運動場で再開できて、運動場の素晴らしさに驚きました。

（二）当時、旧校庭が温存されており、その活用や維持管理に頭を痛めました。さつまいもや菊の栽培をしていましたが、地区特有の強風に悩みました。

（三）二年前には、若狭中核工業団地造成工事が始まったため秋の遠足には高月町の日本電気硝子工場の見学を実施し、職員、子ども共々に関心と理解を深めることができました。

（四）三年目の夏には、本館の大規模改修工事が実施され、教室の改修や配置換えも行いました。この際、子ども達も教具や図書などの運搬作業を実によく手伝ってくれ、元気で素直な野木っ子の素晴らしさに職員一同感心させられました。

（五）この年の秋には、北陸三県社会科研究大会が行われ、野木小が低学年会場となりました。体育館で二年生の研究授業「ゆうびんのしごとをする人たち」が行われ、大勢の参観者の前で子ども達がよく発言し、生き生きと学習に励んだ姿に頼もしさを感じたことが懐かしく思い出されます。

あれこれと想い出はつきませんが、野木小で貴重な体験を得させて頂いたことに深く感謝しております。もう還らない昔々のよき想い出を秘めた野木小、三年先に迎える創立百周年の節目に向かって、更なる発展を遂げられることを祈念しながら終筆させていただきます。

秋の運動会　鼓笛演奏
（昭和63年9月11日）

旧校庭でサツマイモ苗を植えるときの『ふれあい学習』の様子。（平成元年5月25日）

空から眺めた野木小全景。旧校庭があり、現在はそのおもかげがありません。（平成元年11月 撮す）

学校・家庭・地域が一体となって

おおい町　福尾健二

野木小学校から今の学校に転勤して、はや三年が経とうとしています。野木小学校は、わたしが教員として初めて勤務させていただいた学校であります。何もかも分からないわたしに、校長先生をはじめ、先生方、保護者の方々、また

地域の方々にいろいろと教えていただき支えていただきました。三年間持ちあがりで受け持たせていただいた十名の子どもたち。志半ばに転勤になってしまい、一緒に卒業式を迎えたかった十七名の子どもたち。どの子も明るく素直で優しい子たちばかりでした。思い返せば、様々な思い出がよみがえってきます。子どもたちとともに勉強をしたこと。昼休みや放課後には、子どもたちとサッカーやバスケットボールをして遊んだこと。今振りかえれば、どれもこれも懐かしい思い出ばかりです。

野木のすばらしさの一つに、「学校・家庭・地域が一体となって、子どもたちを見守り育てる」ということがあげられると思います。学校においては、私の下手な学級経営に何一つ文句も言わず、保護者の方々の手厚いご協力ご支援をいただきました。夏休みに行った親子キャンプでは、自分も家族の一員になったように、夜まで楽しい時間を過ごさせていただきました。秋には地域の方々と協力して行った体育大会。一緒に準備から後片付けまで保護者だけでなく、野木地区体育協会の方々を中心に多大なるご協力をいただきました。また、学校の授業の一つである「総合的な学習の時間」では、武生にある水田をお借りし、清水様をはじめ老人会の方々にお世話になり、子どもたちとともに、「田植え・稲刈り学習」をさせていただきました。子どもたちを育てるために、これほどまでに家庭や地域のご協力をいただける学校は数少ないと思います。そういう環境で学習に取り組める子どもたちはもちろん、勤務させていただいた私も大変幸せでありました。今の私があるのも一緒に勤務させていただいた先生方や野木地区の方々のおかげであります。

最後になりましたが、四年間ご協力ご支援いただいた方々に厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

会員からの便り

通学路

第37回卒（昭和21年）
向笠　奥村宗寿郎

堤の地籍にあった分教場で育った者にとって、小学校四年から片道六キロの道のりを歩いて本校まで通学したことは自慢のひとつだ。今では考えられないことである。現在は新しい道ができたり、耕地整理でかなり短くなった。先だって　今でも残っている昔の道を探して歩いてみた。

必ずといっていいほど学校帰りに休んだ堤のA家の石はもっと大きいはずであった。また堤から加福六までの山際の道はもっと長かった。今の自分の身長や足幅が大きくなったためであろうか。今見ている現象は嘘で本当は何もないよという般若心経の無眼耳鼻舌身意の言葉を思いだした。実際歳をとって歩きにくくなったときに、この山沿いの道を歩いたとすると小学生のときと同じ道のりに感じるのかも知れない。

思い出せないこともある。本校の前を通り昔の役場前から玉置の集落をきれいな川が流れていたが、この源流はどこなのか思いだすことができない。多分学校から上流は通学路から離れていたのだろう。玉置には昔の川が今でも流れているので以前とは違う川筋になったに違いない。同じ土地に住んでいる者にとってシャモナイことが、離れて住んでいる者にとっては興味あることが多い。また　考えてみると、話している者にとって重大なこともそれを聞く者にとってそれほどたいしたことでないことが多い。

加福六の前の通学路から少し北川に近いところに大きな木が生えていて、その根元に小さな地蔵さんが祀ってあった。この木の種類は思い出すことができないが、田んぼのなかにポツンと生えていたその木は当時心休まるものであった。地蔵祭りに子供のにぎやかな「まいってんか　まいってんか」という呼び込みに恐れをなし、回り道をして帰宅したことがあった。

童謡には赤トンボのように小さい頃の自然をなつかしむ内容のものが多い。片道六キロの通学路も人に関係して思い出すことがほとんどなくて、田んぼや大きな木などに付随してなつかしいことが多い。キチンと区画整理をされた田んぼがつづき、そこをまっすぐにバスで通る今のこどもは通学路にどんな思いをもって大きくなるのだろうか。

運動場が芋畑に

第38回卒（昭和22年）
箕面市　宮川章二

同窓会事務局から突然の寄稿依頼があり、テーマは何でも結構とのことですので失礼を省みながらペンを取らせていただいた次第です。

昭和十六年（一九四一年）四月一日に京都市内の小学校へ入学し、家庭の事情で堤区へ移住して野木小学校へ編入したのが三学期でした。当時は国民学校と言われておりました。歴史に残る第二次世界大戦がはじまったのが昭和十六年十二月八日でした。学習内容は基本的には読み書きソロバンですが、教室では毎日厳しく勅語（天皇の言葉）天祐オ保育シ万世一計ノ皇祖オ不滅大日本帝国天皇ワ……と大人でも理解しがたい訳のわからない勅語を学級全員が暗記できるまで何十回と繰り返し勉強(?)した時代でした。昭和二十年八月十五日（一九四五年）五年生の夏休みになって、戦争という過酷で悲惨な時代がようやく終わりを告げました。それまで運動場が芋畑に、また、山の木を切り倒して畑作りをしたことを覚えています。今考えてみると、隔世の思いと政治の恐ろしさを感じます。

五年生二学期から教育内容も一変して民主主義が施行されて、学芸会で故中川平太夫先生が脚本された題名「民主主義」にクラスの話し合いの中で主役に選ばれ、演劇が好評だったことを六十年を過ぎた今でも懐かしく思い返しています。

運動場は整備されてスポーツも盛んに取り入れられてきました。野木小学校は昔からバレーボールの野木と言われたそうですし、伝統的に引き継がれて強かったそうです。終戦後、軍隊から帰られて教壇に復帰されたスポーツ万能の故福田善正先生にバレーボールの手ほどきを受けたのが最初で、「お前もパスをしろ。」と声をかけられ初めてボールを手にしたのが六年生だったと思います。パスの基本をかなり厳しく指導を受けて上達し、小中高（その間青年団の大会）で活躍して、実業団チームを持つT社にスカウト同様に入社して、福井県代表として日本選手権大会に三回出場できたことも福田先生の指導が大きなスタートの原点だったと、現在も人生の大切な糧として懐かしく思い返しています。

古里を後にして十五年、七十二才になり今は全くの都会人になりました。この年齢になると、まず健康第一のスケジュールを組立て、ウォーキングを実施しております。初めてから六年目になりますが、年間三・四十回前後の実施です。新聞テレビ等でよくいっておりますが、継続することが第一だと思います。条件にも恵まれて万博運動公園を一周一時間三十分のウォーキングを日課にしております。Jリーグガンバ大阪の本拠地であって練習風景も見ることもできて、この上もなく楽しく時間を過ごすことができます。

時代の流れと共に、野木村から上中町にそして平成の大合併の名のもとに上中町と三方町が合併して、若狭町誕生と聞いております。それぞれ難しい問題点もあって最終的に住民投票の結果となったそうですが、現在外野から見て個人的な見解として、もし将来合併があるとすれば、若狭町と小浜市がいっしょになって、若狭市誕生というニュースを生存中に聞きたいものだと思っています。

時代は変わりて

第45回卒（昭和29年）
上野木　植野俊子

小学校時代から五十五年が過ぎ、私はこの寄稿の依頼を受けた時、実際のところ「困ったなぁ、どうしようか。」と思いました。何を書こうかと考えていると、小学校時代に過ごした一つ一つが懐かしく思い出され、知らず知らずのうちに気持ちが幼い頃に戻ってすごく快い気持ちになっていました。

私たちの子どもの頃は、帰りの道中は友達といっしょに道草をして好きなところに寄り道をして帰ったものでした。私たちが子どもの頃の休み時間は、講堂の隅の方でお手玉（こんめ）をしたり、ゴム跳

びをしたり逆立ちをして何歩歩けたか競争をしたり、あっそうそう、外でカンけりや川ではシジミとりをしたり、四月から五月にかけて、タニシをとったりしていたのも懐かしく思い出しています。

今の小学生は、集団での登下校をされていますが、いっしょについていけないくらい速く歩いて感心しています。今の世の中、幼い子どもたちが被害に遭ったとニュース等で報道されている中、野木の里からは絶対に被害の出ない豊かな里であるように願いながら、子どもたちの学校への行き帰り、パトロールをできるだけするようにしたいと思っています。

今は生活環境も変わり、私たちが遊んだ野道や溝川がなくなり、外では遊ぶことがなくなり残念です。これも時代の変わりだなぁと昔を懐かしく思い出しています。

これからもどのように時代が変わっても、野木はどこから見ても静かで優しく、安心して楽しく暮らせる「平和な野木の里」であってほしいと願っています。

ふり返れば六十五歳

第45回卒（昭和29年）
下野木　田中　肇

「ふるさとの山にむかいて　言うことなし　ふるさとの山はありがたきかな」はや六十五歳、この言葉がわかるような気がする歳になりました。

今日、八月十五日は終戦記念の日、小泉総理大臣の靖国神社参拝の話で一日が始まり、一日が終わったような日でした。

我が国も六十年前には敗戦国として、大変な貧乏生活でのスタートだったと言われています。

今回、投稿の機会を与えられましたので遠い昔を振り返り、終戦の頃から小学校時代について思いつくままを記させていただきます。

昭和十六年満州国（現在の中国）で出生、終戦前に帰国し野木の里で現在に至りました。

特に記憶に残っていることは、終戦間近い頃と思いますが、頭上に敵機が飛来し裏山に母と逃げたこと、衣食が充分なく冬でも今のような防寒衣や長靴などがなかったこと、美味しい食事どころかお米のご飯を食べるために、大変苦労する時代でした。

このような状況から、当然のこと日常生活での風呂や食事の煮炊きにも、山の木々や稲わらを燃料としての生活でした。もちろん洗濯機、テレビ、自動車等のないことは言うに及ばず、自転車すら皆が持っていない、今では想像も出来ない貧しい時代でした。

私たちの年代は、その戦後間もない頃の小学校入学でした。その頃の校舎は木造で、今ほどきれいで機能的でなかったと思いますが、懐かしく思い出されます。

学校での毎日の生活は、教員室の外につられた鐘の音を合図に授業や休み、そして掃除などを行いました。今でも目をつぶれば、六年間のたくさんの思い出や当時の校舎、二宮尊徳の像とともに鐘の音が聞こえてくるようです。また、その頃の登下校は、今とちがってのんびりしたものでした。通学路は今のような広い舗装道ではなく狭い砂利道で、その側面には小川が流れ、小ブナやドジョウ、トンボのヤゴなどが棲み、これらの小動物を追うなどしながらのんびりと家路についたものです。

また、夏休みともなると近くの川へ泳ぎに行ったり、川魚やカブトムシ、クツワムシ捕りなど自然の中での遊びに明け暮れていました。冬には、今のような除雪機がなかったので、父母のスコップや雪ふみによって、わずか幅三十センチ足らずの一本道を長いマントを着ながら歩いたものです。

幼少の頃を振り返り思いつくままに記しましたが、その後の日本は世界でも例を見ないほどの経済成長をとげ、物質的にも豊かで安定した社会を迎えることができました。

しかし、社会の急激な変化は、私たちの生活に光と陰の部分を生み出すこととなりました。陰の部分として、子どもたちの安全の確保が困難になってきたことがあげられます。不審者による校内での児童殺傷事件や登下校時の児童・生徒が犯罪に巻き込まれたりして、昔では考えられないような事件が発生しています。

これからは、家庭・学校・地域が一層の連携を図り、子どもたちが毎日安心で安全な学校生活が送れる平和な社会になりますように祈りたいものです。

小学校の想い出

第70回卒（昭和56年）
兼田　東山清彦

小学校を卒業して、早くも二十七年の月日が経ちました。私たち卒業生は、ひのえうまということで八名の少人数のため、教室が大変広く感じられました。

また、六年の間に木造の講堂が今の体育館に、そして現在の場所にグラウンドができました。在学中はプールはなく、上中中学校のプールを利用していました。

その間、楽しかったことがたくさんありますが、六年生での出来事が特に印象に残っています。修学旅行、親子遠足、サイクリングなどです。

枚方パークにて

修学旅行では、上中町内の六年生がいっしょに奈良・大阪・京都方面へ一泊二日の旅行でした。他の小学校との交流、それまで行ったことがなかった東大寺、大阪城などが楽しみでした。奈良の大仏を見たときは、あまりの大きさにびっくりしました。また、バスの中や旅館での他の小学校の子との交流も、最初はおとなしかったものの次第に打ち解け合い、先生に注意されるぐらいにぎやかなものとなっていました。

親子遠足では、バス、電車といろいろ乗り継いで、菊人形で有名な枚方パークへ行きました。菊人形を見た後、ジェットコースターやゴーカートに乗りました。みんなが「キャー、キャー」と騒ぎながら楽しみ、あっという間に時間が経ちました。

楽しかったゴーカート

サイクリングでは、熊川にある民俗資料館をめざして学校を出発しました。民俗資料館では、昔の民芸品がたくさん並べられており、興味を持って見て回りました。その後、松ノ木神社で昼食をとった後、帰りに井根山で魚釣りをしました。私は全然釣れませんでした。

同級生と小学校の経験は中学生になっても、そして今でも私の財産です。

最後になりましたが、会員の皆様のご健勝とご多幸、母校のますますの発展、本会の活動が充実したものになりますことを祈念して、思い出の文とさせていただきます。

新成人からの便り

「ふるさと」を離れて

第90回卒（平成11年）
兼田　清水美緒

私は現在、大学進学に伴い福井県を離れ遠く栃木県のほうで一人暮らしをしています。栃木県からは気軽に帰省できる距離ではないため、よく「ふるさと」を恋しく思うようになりました。やはり「ふるさと」というものは人にとって特別な場所です。どこにいても、ふとした瞬間に思い出します。また、私が最も感じたのは家族の大切さです。家に帰ったときに誰かが「おかえり」と言ってくれる事がどれほど嬉しく、安らぐものかがわかりました。以前よりさらに家族を好きになったし、大切にしたいという気持ちが強くなりました。実際に離れるまでは外に出たくて仕方がありませんでしたが、近くにありすぎて当たり前に思い大切なものに気づかないとは、正にこのことだと今では感じています。豊かな自然に囲まれ、温かな人々にあふれた野木の里は私にとって自慢です。遠く離れ

た栃木の地にいても、この素晴らしい「ふるさと」があるからこそ、頑張ってやっていけるのだと思います。この自然と人柄がこれからもそのままであってほしいと思います。私自身将来についてはまだ明確には決めていませんが、この素晴らしい野木の里に帰って来ることができたらいいなと思っています。

さらに今年は成人式を迎えるという節目にも当たります。ここまで育ててくれた両親には深く感謝しています。多くの迷惑もかけたし、心配もたくさんあったことだろうと思います。しかし、常に私を優しい愛情で包み込んでくれていました。この両親の下に生まれてきて本当によかったです。成人するということは、成人としてふさわしい行動、成人としての責任が求められると思っています。そうした自覚を持ち、自立した人間へと成長したいと思います。そして、今の目標や夢の実現へとあきらめずに立ち向かっていきたいです。周囲には私を温かく見守って支えてくれる沢山の人がいます。その有り難さを実感しつつ、私の目標である両親のような人になりたいと思います。

最後に「ふるさと」というのは離れてこそ実感できることが大きいものです。この野木の里を多くの人が素晴らしい「ふるさと」と感じていると思います。これからより多くの人にとって、野木の里が心のよりどころとなるような「ふるさと」であればいいなと思います。

おもいで

第90回卒（平成11年）

堤　宮川拓也

平成十七年三月下旬、私は大阪に向かった。高校生の時に自分の進路に悩んでいた中、当時の担任の芝田先生が、「宮川、お前料理人が向いとると思うぞ。」と言われたが、私の心の中には、当時バンドをしていたので音楽学校に行くか、美容学校しかなかった。

確かに料理は小さい頃からチャーハンやお菓子作りなど、作るのは嫌いではなくどちらかと言えば好きな方だった。あの頃の私には大学に進学するという発想はあまりなく、何かの専門学校に進学をして資格が取りたかった。

自分の中でよく考えて、バンドで成功するなんて一握りだし……。そう考えていたら自ずと料理人という道が見えてきた。担任の先生から教えてもらった「辻調理師専門学校」に進学すると決めた。正直その学校のことは全く知らず、料理の「東大」とまで言われているところらしい。

―高校三年生の秋の話だ。―

さっそく私は学校見学に行った。学校の印象は高級なホテルのような感じがした。入学してからは別に思わなくなったが、私はその設備のよさと学校の雰囲気で当校に進学することに決めた。

卒業式も終わり、いよいよ入学式。期待よりも不安の方が多かった。大阪城ホールで入学式が行われ、全校生徒の数も多くて驚いた。入学式も終わり、初めての授業。そこでフォアグラとキャビアが出てきてまた驚いてしまった。今まで食べてきたものより味が全然違った。みそ汁にしても、昆布と鰹節からとる一番だしを使い、チャーハンも本場の中華の火力なので、ご飯もパラパラでとてもおいしかった。

先生も一流の方ばかりなので、自分の技能向上を助けて頂いたと思う。友達もいいやつばかりで、一緒に朝までファミレスで夢を語り合ったり、よき相談相手になってくれたりした。

この大阪での一年間はとても短く、卒業してからとても寂しい気持ちになった。私は大阪に出て来て本当に良かったと思っている。いろいろな人と出会えたのも一つだし、貴重な経験ができたと思う。今までお世話になった人に感謝し、仲間を大切にしたいと思う。

私の夢は、有名な料理人になることではなく、料理を作ることに誇りを持ち、お客さんに喜ばれるような料理人になることだ。後々は実家を継ぎ、料理屋も開きたいと思う。

児童作文（家庭の日の作文）

金賞

弟の入院

四年　齋藤花野

わたしには、六才の弟がいます。今年小学校に入学しました。朝登校するとき、六年生のお兄さんとよくふざけています。休み時間には、元気に五・六年生のお兄さんと遊んでいます。わたしは、弟が入学して楽しそうにしているのでうれしいです。

そんな元気な弟ですが、今年の春休みにけんさ入院をすることになりました。

お母さんが、「今度、大ちゃんが入院するから、お父さんといっしょにごはんを食べたり、昼間はおじいさんと宿題をしたりしてね。」と言われたのでびっくりしました。

「なんで入院するの。」と聞いたら、「本当に悪いかどうかけんさするだけだから、だいじょうぶだよ。」と言われました。わたしは、それを聞くとなんだかいやな感じがしました。だって、お母さんがいなくてごはんやせんたくはだいじょうぶか、弟は、けんさしてこわくないかと、とても心配になったからです。

入院して次の日、わたしはお見まいに行きました。弟は、いつものように元気でした。でも、お母さんが、「頭のけんさで、音がガンガンいうからこわがってたで。」と言ったので、わたしはもっともっと心配になってきました。

病院の帰り、わたしは百円ショップでトランプと色えんぴつをかって、家でぬりえを作りました。それを弟へプレゼントしました。それをわたすと、弟はうれしそうでした。家では、弟とけんかばっかりしていたのが、いつのまにか仲よくなっていました。

入院が何日もつづいてわたしがお見まいに行ったら、弟はすやすやねていました。その弟は、かなしそうでした。わたしは、きっとこわかったんだなと思いました。

何日も、何日も、何日も入院がつづいて、やっとたいいんの日がやってきました。わたしはうれしくてたまりませんでした。けんさのけっかはだいじょうぶでした。わたしは、ほっとしました。

弟がたいいんして、またもとどおりのお父さん、お母さん、わたし、弟の四人のくらしになりました。

弟は一年生になり、わたしと学校のことをいろいろ話します。「きょう、学校でおばけ屋しきをして楽しかったね。」「きょうの給食の米粉パンおいしかったね。」とか言っています。

みんなが家にいて、今まで気づかなかったけれど、本当によかったです。

もう、入院はしないでね。大ちゃん。

銀賞

くつあらい

二年　竹村佳久

朝ごはんを食べたあと、おかあさんが、「きょうは、いい天気だから、くつあらいしよう。」と言いました。ぼくが、「うん。やろう。」と言うと、いもうとや弟も「やろう。やろう。」と、言いました。

みんなじ分のくつをもってきて、まずくつを水でぬらしました。おかあさんが、ふるいハブラシを一本ずつくれて、せんざいもつけてくれました。ぼくは、学校の中ばきや外ではいているくつをあらいました。やっぱり、外ではいているくつは、どろがついていたり、中にすながはいっていたりしてよごれていました。ぼくは、力をいっぱいいれてゴシゴシあらいました。いもうとや弟も、おかあさんに手つだってもらいながら、がんばっていました。

おかあさんが、ぼくのくつを見て、「もうちょっとであながあきそうやな。」と言いました。でもぼくは、「あながあくまではく。」

と言いました。おかあさんは、おとうさんのくつもあらっていました。すごく大きかったです。水でよくすすいで、せんざいをおとしました。日のあたるところに、くつをたてかけてならべました。ぜんぶで八足ありました。おかあさんが、「いっぱいあらえたな。」と言いました。ぼくも、「ほんまやな。いっぱいならんどるな。」と言いました。

夕がたくつを見に行ったら、ぜんぶかわいていました。きれいになっていて、うれしかったです。またくつあらいをしたいです。

銅賞

チョコが教えてくれたもの

六年　田中愛梨

去年の冬、私の家に一匹の犬がやってきました。名前はチョコ、オスのミニチュアダックスフンドです。初めは、犬を飼うことにお母さんもお父さんも、おじいちゃんもおばあちゃんも、みんな反対でした。

お父さんは仕事があり、普段の世話はできないし、お母さんとおばあちゃんは、犬にさわるのもきらいだし、ほえたりかんだりするからといって反対しました。唯一、頼りになるおじいちゃんは、私に、「愛梨が学校に行っている間、世話をしてあげたいけど、おじいちゃんも脳こうそくだから、ちゃんと見てあげられない。ちゃんと飼えないのに犬を飼うということは、命をそまつにすることだから、飼うことは難しい。」と言いました。私は、おじいちゃんにいろいろ理由を言われても納得できず、友達の犬を飼っている家がうらやましく、思わず泣いてしまいました。それを見たおじいちゃんは、しばらくして私に、「そんなにほしいなら、できるだけのことはしてあげるから飼ってみるか。」と言いました。

そんなわけで、わが家に犬がやってきてからは大変だったけど、今年の夏、七月二十八日チョコが一才の誕生日をむかえました。今では、えさをやったりトイレの後始末は、犬にさわるのがきらいだったお母さんが、「毎日チョコ見ていたらかわいくなってきた。」と言ってやってくれています。お父さんは、休みの日にはチョコをつれて公園につれていってくれます。優光もこわくてさわれなかったけど、今ではかわいがってくれて、一緒に散歩も行ってくれます。私は、チョコが子犬の時ほえたりかんだりしないようにと、本を見て一生けん命にしつけました。だから、おじいちゃんもおばあちゃんも、「この犬はあんまりほえんしかわいいなあ。」と言ってくれます。

私は、チョコを通して、生き物を飼うということは、家族の協力や私に対する思いがなかったら飼えないんだなあと思いました。今、新聞やニュースで、自分の子どもを虐待したり、悲しい事件が起きている中で、私は家族に愛されているんだなあと思いました。チョコがいなかったら、気づかなかったことかもしれません。私は、この家の子でよかったなあとしみじみ思いました。

野木小学校6年生

将来の夢

○ぼくの将来の夢は、歌手になることです。以前、新潟県の地震の被災者の方の所で、歌っている人がいました。避難されている人たちは、歌を聴いて夢をもらったと言っていました。ぼくも人に夢を与えられるような歌手になりたいです。

伊藤諭志

○私の将来の夢は、パティシエか看護師になることです。パティシエは、お菓子を作ることが好きだからです。いっぱい勉強して、おいしいお菓子を作れるといいです。人の役に立てる仕事がしたいです。

植野遥

○ぼくの将来の夢は、プロ野球選手です。なぜプロ野球選手がいいかと言うと、野球が好きだからです。そのために、毎日ランニングや素振りをがんばっています。これからも、毎日トレーニングをがんばって夢をかなえたいです。

内方逸人

○ぼくの将来の夢は、学校の先生になることです。ぼくは図工が好きなので、図工のできる先生になりたいです。だから、がんばって勉強をしてみんなに好かれる学校の先生になりたいです。

奥本知記

○私の将来の夢は、はっきりとは決まっていません。でも、今のところは、病院の眼科の先生になることです。なぜかというと、私は目が悪いので、目が悪い人の気持ちがよくわかるからです。だから、しっかり勉強してなれるようにがんばります。

田中愛梨

○私の将来の夢は、ペットショップに勤めることです。なぜかというと、動物が好きだからです。ペットショップに勤められるように、動物のことをたくさん勉強して、よい店員になりたいです。

田中靖乃

○私の将来の夢は、やさしいお母さんになることです。家の家事や料理などをしっかりしたいです。その夢をかなえるために、今、お母さんの仕事をあまり手伝えていないので、これからはしっかり手伝おうと思います。

中川愛理

○ぼくの将来の夢は、プロ野球の実況アナウンサーになることです。もともとぼくはおしゃべりなので、一番合うと思いました。でも、体力もいる仕事だと言われたので、これからもがんばって運動をして、体力をつけておきたいです。

福井健人

○ぼくの将来の夢は、プロ野球選手になることです。なぜかというと、今のプロ野球選手を見ていてすごくかっこいいからです。ぼくはプロ野球選手になって、ホームランをいっぱい打って活躍したいです。

藤田佳輔

○ぼくの将来の夢は、スポーツ選手です。理由は、ぼくはスポーツが好きだし、スポーツで活躍している人が多いからです。ぼくも大好きなスポーツで有名になりたいです。みんなが知っているとても有名な選手になりたいです。

山形真司

○ぼくはプロ野球選手になって、よく打つ選手になりたいと思っています。百五十メートルぐらいボールを飛ばしたいと思っています。そのためには、毎日素振りをしておかないと絶対無理だと思うのでがんばります。

山田雄大

平成17年度 野木小学校同窓会会計決算書

〔収入の部〕

項目	17年予算	17年決算	増減	備考
繰越金	35,500	35,500	0	平成16年度より繰り越し
会費	305,000	302,000	△3,000	1,000円×302戸
広告掲載料	0	0	0	
雑収入	10	2,006	△1,996	寄付金　利息
合計	340,510	339,506	1,004	

〔支出の部〕

項目	17年予算	17年決算	残額	備考
会議費	10,000	2,336	7,664	会報編集委員会茶菓子 等
事務費	14,000	23,100	△9,100	会報送付用封筒
通信費	100,000	94,680	5,320	会報郵送料、会報寄稿依頼状郵送料 等
会報費	150,000	113,000	37,000	会報印刷代(1400部)、寄稿謝礼図書券(13人分)
記念品費	5,000	5,000	0	卒業記念品 500円×10人(英和辞典補助)
総会費	13,000	3,960	9,040	理事会役員会茶菓子
特別会計費	30,000	60,000	△30,000	特別会計へ繰り入れ
予備費	18,510	0	18,510	
合計	340,510	302,076		

収入決算額　　支出決算額
339,506円 － 302,076円 ＝ 37,430円　　残金37,430円は平成18年度へ繰り越します。

監査の結果、正確に執行されたことを認めます。

平成18年3月29日　　監事　武倉嘉正　山形久喜

編集後記

野木小学校同窓会報第十八号をお届けします。大変お忙しい中、原稿執筆を快くお引き受けいただいた皆様、すばらしい原稿を書いてお届けいただき、誠にありがとうございました。おかげさまで、充実した紙面となりました。厚くお礼申し上げます。

さて、会報・会誌等で何回か紹介されていた、本校の百周年記念事業について、幹事会で再々検討して参りました。最終的には過日の区長会代表者、野木を創る会代表者、及び公民館長等と会議を開催し、平成二十年度中に実行することを決定していただきました。詳細につきましては、幹事会、臨時総会の後、実行委員会（仮称）を立ち上げたいと考えておりますので、会員の皆様方にはたいへんお世話になると思いますが、母校発展のために何卒よろしくお願いいたします。なお、平成十八年三月までの卒業生は、二千七百五十名です。

同窓会の主な事業は、毎年の会報と五年に一度の会誌の編集・発行ですが、会員の皆様の積極的な投稿近況報告等お寄せいただき、活気ある紙面となるようにご協力お願いします。また、住所移転等は必ず野木小学校にもお知らせください。毎年五十通前後が、住所変更で返ってきます。

末筆ながら、会員の皆様のご健康とご家族の益々のご健勝とご繁栄をお祈り申し上げます。